

巻頭言

エゴサーチ（？）

東京大学大学院医学系研究科 公共健康医学専攻

橋本 英樹

巻頭言のテーマに事欠いて、ふとアマゾン書籍で「医療 経済学」と打ったらなにがでてくるかを試してみた。日本語では460件ほど出てきたが、最初の30くらいであとは健康志向ものとか関係ないものばかり。西村周三先生の1977年「現代医療の経済学的分析」も出てきたが、啓蒙書・実践書を除くとトップに出てきたのは河口洋行先生の「医療の経済学」第4版、次いで泉田先生と自分が編集させていただいた「医療経済学講義」の補訂版、細谷・増原先生の「医療経済学15講」と続き、井伊・五十嵐・中村先生の「新医療経済学」、特化したテーマものとしては角田由佳先生の「看護サービスの経済・政策論」第2版など。アマゾンのご推薦「関連書籍」は、古いところでは西村・田中・遠藤先生編集による「医療経済学の基礎理論と論点」、最近ものとしては大竹先生の「医療現場の行動経済学」や康永先生の「健康の経済学」、同じ筋で先行ものとしてはYoo先生の「改革のための医療経済学」。津川先生の「世界一わかりやすい医療政策の教科書」なども出てきた。英語ではhealth economics textbookと打っただけで6,000出てきたが、定番はPhelpsのHealth Economics 6th ed.、RiceのThe Economics of Health Reconsidered 4th ed.、FeldsteinのHealth Policy Issue 7th ed.、Folland, Goodman, and StanoのThe Economics of Health and Health Care 8th ed.、GetzenのHealth Economics and Financing 5th ed.、Santerre and NeunのHealth Economics; Theory, Insights, and Industry Studies 6th ed.など。こちら懐かしいところではFuchsのWho Shall Live?の2nd expanded ed.が2011年に再掲されていたのと、ReinhardtのPriced Outなど。費用対効果系は古典となるDrummondらのMethods for the Economic Evaluation of Health Care Programmes 4th ed.の新しい共著者らであるBriggs, Sculpher, and ClaxtonのDecision Modelling for Health Economic Evaluationも出ている。ただし、これら重厚な教科書に比べてライトスタイルのものも最近は流行りだしているようだ。

このように、河口先生の教科書を除いて日本の教科書は欧米教科書に比すると版が浅いものが多い。日本は教科書の数だけでなく種類や幅も限られているように見えるが、欧米の医療経済学徒のマーケットサイズとの違いを考えれば、むしろ定番が少なく、普遍的な医療経済理論よりも時事的な医療経済問題を扱ったものが多いといったほうがいいのかもかもしれない。需要と供給のバランス問題だけではなく、おそらくマーケットの構造的問題があるのだろう。次世代人材育成の問題は医療経済学だけでなく日本システムの共通課題でありそうだ。それが何かを明らかにするのも医療経済学のテーマのうちか？